

松山市が主催する「坊っちゃん文学賞」は今年で20回目、そしてショートショート文学賞として生まれ変わってから5回目を迎える。審査員長で松山市出身の田丸雅智さんと、俳都松山大使で俳人の夏井いつきさんが語り合う、それぞれの「種まき」、そして「ことばと文学のまち」から発信する思いとは――。

取材・文：河村道子  
写真：千川 修

# アイデアで魅せる！ ひろがることばの世界

## 田丸雅智 × 夏井いつき

### 坊っちゃん 文学賞とは？

正岡子規を生み、夏目漱石の小説『坊っちゃん』に描かれた文学の街「松山市」が主催する本賞は瀬尾まいこや中脇初枝など、人気作家を世に送りだしてきた。第16回からショートショート文学賞としてリニューアル、今年で20回目を迎える。前回は応募作が7000作を超えるなど、大きな盛り上がりを見せている。

**田丸** 俳句のタペストリーが商店街にはためいたり、至るところに句碑があったり。僕は大学入学を機に故郷・松山から東京へ行ったのですが、外に出て、実感したのが、松山はことばの多い街だなというところ。ことばが多いとうるさく感じてしまいがちですが、この街にはとても馴染んでいる気がします。

**夏井** ことばを上手に街に溶け込ませているのは松山市の努力だと思いますよ。街の風景にどうやってことばを落とし込んでいくかで、ことばで立っていかうとする街の腹の括り方が見えてくる。松山市がいろんなことばを全国から募った「だから、ことば大募集」には、私も関わりました

が、選んだことばをどう使うんだらうと思っていたら、選

ばれた作品がばーんと書かれた路面電車が走っていたり、松山空港の階段にさりげなく入れてあったりしてね(笑)。素敵なことばを何気なく目に留められるミュージアムのようになまちづくりをしているんです。

**田丸** その風景は、自分にも自然に馴染まれてきていますね。そして小学校の宿題には当たり前前に俳句が出る。

**夏井** 松山の子は俳句、否応なしにやっていますよね。「俳句の種をまく」活動で、全国の学校を句会ライブという俳句の授業をしに回っていたんですが、よその都道府県はもちろん県内でも、「俳句が宿題になるなんて！」と驚かせることが多くて。あ、そっちが普通なんだと(笑)。

**田丸** 当時はやらされている感もありましたが(笑)、よ

かったなと思ってるんです。俳句に触れる機会があったことで、五音、七音の気持ち良さを感じ、気づいたら自分の文章にそういうリズムができていた。それは明らかに俳句の影響を受けていますね。その上で、自分がショートショートという短い文章を紡ぐようになったのは、ものづくりで親しんできたことが大きいと思っています。僕の祖父はそれぞれ大工と鉄工所をやっ

松山市  
おすすめスポット

田丸さん  
『三津浜』

僕は三津浜育ち。古民家カフェができるなど、おしゃれな町になりつつある三津には今も、昔ながらの渡し舟があります。三津浜での思い出は、近くにある梅津寺という浜でのことと一緒に「海酒」という作品にも閉じ込めました。穏やかな瀬戸内の海を感じていただける場所です。

夏井さん  
『上人坂』

一遍上人の生誕地である宝蔵寺へ向かう上人坂は、『坊っちゃん』で、山門から寺までの両側を遊廊が占めていて前代未聞だと登場した坂。今は遊郭はなく、宝蔵寺の三軒下には、私が結んだ庵「伊月庵」があります。漱石や子規が歩いた坂に思いを馳せながら、句会などはいかが！

夏井 まったく一緒です。俳句は作り手と読み手がいて成立する。座の文芸がなんです。高浜虚子は「選は創作なり」と言っています。彼ら、俳句を選んでは、評価すること、創作行為だと

言っているの。田丸 ショートショートもそのうちです。アイデアを生むのも好奇心なので。

夏井 “自分は才能がないから”ってよく断られます。田丸 はい。自分にはできませんから。夏井 俳句を断る人の理由って、だいたい、才能がありません、知識がありません、なの。俳句は好奇心さえあれば詠めるし、やりだしたら一生、退屈な時間はないから、という言い方をするんだけど、好奇心で俳句ができるって、なかなか信じてくれない。

田丸 小学生からシニアまで、少年院や企業でも開催しているんですけど、一般向けの講座では本やショートショートが好き、創作に興味のある方が多いでしょうか。そして女性が多いのでしょうか。夏井 時間帯も関係しているんですけど、俳句もカルチャー教室は女性が多いですね。ただ、全国で開催している句会ライブでは性別も年代も関係なくあります。一家全員で来てくれることが多いので。最初、お父ちゃんひとり来て、ご夫婦で来て、親を連れてきました！今度は子

夏井 句会ライブでは、私

ていたんですが、その影響でアイデアをもとに何かをつくるのが好きになって。夏井 そこに文学が入ってき

たんですね。田丸 はい。アイデアでちっちゃい世界をいっぱい生み出すショートショートに惹かれ、ものづくりからお話づくりに。夏井 アイデアを楽しむものなのね、この短い文学は。田丸 現代ショートショートは「アイデアと、それを活かした印象的な結末のある物語」。よく混同されるのがショートストーリーですが、たとえば電車のなかで恋愛の駆け引きをする男女の短いストーリーがあつたとします。会話はドキドキするけど特に何も起こらない場合は、ショートストーリーと言える可能性が高いです。それに対して、何らかの新しいアイデアが含

まれてるのがショートショートという感じ。俳人の神野紗希さんに、「ショートショートとショートストーリーは俳句と川柳くらい違うんですね」と言われたことがあります。夏井 今、私もおなじこと、思った！ひよつとすると、俳句の季語にあたるものが、ショートショートではアイデアということですか？

田丸 そうだと思っんです！それ、ぜひ、皆さんにお伝えしたくて。僕の思う、俳句とショートショートに通じるものは、季語とアイデアという核になる、かけがえのないものがあるところ。そしてショートショートはことばの取捨選択が生じます。すべてを書くことで失われるものがあるし、逆に削りすぎると伝わらなくなる。そのあわいをちや

んと攻めていけるか、ということも俳句と近い気がしているんです。夏井 散文と韻文という境界線はあるけれど、書かない選択は共通点ですね。俳句は十七音という制限があるので、書かなくていいところは書かない。たとえば「蟬の声が聞こえる」だと、「蟬の声」と書いたら、もう聞こえているんだよ！」と「プレバト!!」みたいな話になりますね

田丸 ショートショートのアアイデアとも通じる季語で、凌霄花（のうぜんのはな・のうぜんかずら）など、あまり馴染みのないものを使うとき、たとえば誰もがよく知る「蟬」を使うときと同じ感覚で詠まれるんですか？

田丸 ほんと言いたい。少年のような心を持ったままの方もいらつしやるし、ビジネス的なセンスを持つてるがゆえに面白い、その好奇心をぜひ開放してください。

夏井 基本的には同じ。その季語を知らない人でも、これが季語に違いないくらいはわかるはずだから。そしてひとまず詠んで、この季語、知りたいなと思わせたら勝ち。興味持った人は調べるじゃない？調べてみると、誰それさんの家の塀にあつた花だ！とか、知識と体験がその瞬間に結びつく。それは素敵な効果であり、力だと思ふ。だからあまり恐ろげに使いませんね。俳人の好奇心を信じているので。俳句は才能や知識ではなく、好奇心の量で詠むものだと私は思うので。

田丸 ショートショートもそのうちです。アイデアを生むのも好奇心なので。

夏井 “自分は才能がないから”ってよく断られます。田丸 はい。自分にはできませんから。夏井 俳句を断る人の理由って、だいたい、才能がありません、知識がありません、なの。俳句は好奇心さえあれば詠めるし、やりだしたら一生、退屈な時間はないから、という言い方をするんだけど、好奇心で俳句ができるって、なかなか信じてくれない。

田丸 小学生からシニアまで、少年院や企業でも開催しているんですけど、一般向けの講座では本やショートショートが好き、創作に興味のある方が多いでしょうか。そして女性が多いのでしょうか。夏井 時間帯も関係しているんですけど、俳句もカルチャー教室は女性が多いですね。ただ、全国で開催している句会ライブでは性別も年代も関係なくあります。一家全員で来てくれることが多いので。最初、お父ちゃんひとり来て、ご夫婦で来て、親を連れてきました！今度は子

夏井 句会ライブでは、私

どもたちも連れてきました！ってね(笑)。

田丸 一方、企業向けの講座になると、男性が多くなりすぎますね。普段なかなか来てくれないと感じています。

夏井 おつちゃんたちが本気で好奇心持つてくれると、切り口が面白いよね。おつちゃんたちならではの物事に対する皮肉な視点、どうしても裏から見たいところとか。女性軍が、心がほっと温かくなるようなことをうれしそうに喋っていたりすると、いやいや、ちよつと待ちなさいみたいな(笑)。そういう視点が入ってくると、会場に化学反応が起きる。世の中のおつちゃんに、あなたの好奇心を開放してください！と言いたいですね。

が言う通りにやったら5分で一句できるから”って。最初、何百人が半信半疑で、えー!?みたいな声があるんだけど、絶対にできる。そしてできたという成功体験を持って帰ってくださる。それが大事よね。

**田丸** 書き方講座のときは、参加者の方だけではなく、横で見守る主催の方にもやってほしいと思います。あなたも書いてください”と僕、いつも言ってます。

**夏井** すぐ言い訳するの。子どもたちは感性がキラキラしてるからとか。別に子どもだけが感性、キラキラしているわけじゃない、子どもでも大人でも、最初はおんなじつまらないものから始まる。学校で句会ライブやるときは、この体育館にいる人全員、参加だからねというのを鉄の掟にしているんです。ちよつと観にきました、という地域の方にも、ここに足を踏み入れたら参加してください、参加しないならどうぞお帰りください。取材に来た新聞社の方やカメラマンにも言いますね(笑)。

**田丸** さすがです(笑)。  
**夏井** いやあ、あなたも苦労してきたんやなあ(笑)。

**田丸** いえいえ(笑)。ようやくこの活動を始めてから10年を迎えたんですけど、夏井



## 開かれた文学賞に、 そしてショートショートのひとつの 頂にしていきたいんです(田丸)

たまる・まさとも●1987年、愛媛県生まれ。2011年『物語のルミナリエ』に「桜」が掲載されデビュー。樹立社ショートショートコンテストで「海酒」が最優秀賞受賞。坊っちゃん文学賞などにおいて審査員を務めるほか、全国各地でショートショートの書き方講座を開催するなど、現代ショートショートの旗手として幅広く活動中。

思う。私たちの活動は、自分たちの創作活動とともに、外の広大な平野に種をまくこと。アイデア勝負なら、広い荒野で走り回るほうが絶対、活性化していく。

**田丸** 絶対、そう思います。夏井さんの100年後の未来に向けての種まき活動に、僕も影響を受けているんです。ショートショートは長らくデビューにつながる文学賞がなかったんです。いつか誰かが、

と思っていました。あるとき、ムーブメントは今、自分でつくるものなんじゃないか? とハツとして。勇気を振り絞って文学賞を立ち上げました。その賞は終わってしまいました。その賞は終わってしまいましたが、エッセンスを継承するものが「坊っちゃん文学賞」だと思っています。そして今、吹く風が変わってきたということを実感しているんです。

### 松山は、ほんとの意味の「こころのまち」になる

**夏井** 「坊っちゃん文学賞」は以前、長・中編の賞でしたよね。それが2019年からショートショートの賞に変わった。時勢のなかで方向転換する、そういう波のなかにあったんだなと感じました。私の知っているショートショ

トって、星新一くらいで止まっているんです。今回、改めて受賞作を読んで、あ、こういう風に進化というか、分化しているんだー! とちよつとびつくりしました。

**田丸** わあ! それ、目指してきたことですので、めちゃくちゃうれしいです。

**夏井** 星新一、筒井康隆の描くSF一本! というイメージしかなかったから、こんな風にバラエティを育ててきているんだと思いました。でも、それゆえに審査は難しいんじゃない? パターンや題材にしても、これだけ違うものと同じ土俵で評価していくというのは。

**田丸** そうですね。SF的なものもあれば、ファンタジックなもの、ホラーテイストのもの、様々あって。

**夏井** 変な例だけど、ステーキとラーメンと、これでどれ一位にしますかという(笑)。

**田丸** そうですね(笑)。審査員のなかで意見が割れることもありますが、最終的にはいつも満場一致で送りだしています。審査に携わっているのが、僕以外では、声優の大原さやかさん、映画監督の山戸結希さんで、それぞれ独自の視点で、僕のなかにない意見を持ってくださる。審査はめちゃくちゃ建設的で楽しい

です。さらにプロの目線とはいえ、自分のバックグラウンドによって増幅される部分もあって。それは僕もある程度、自覚がありますね。海の話に弱いとか、ほろりとした話、おじいちゃん、おばあちゃんものに弱いとか。でもそういうときって、逆に冷静にもなれるんです。

**夏井** あの俳人は、母ものに弱いとか、俳句でもそれ、あるあるですよ(笑)。

**田丸** 受賞作で注目していた方がいいところがありました。去年でいうと、大賞は「ジャイアントキリン群」という野球の話、佳作には都市が降ってくる、ザ・SF作品の「メトロポリスの卵」、一昨年の大賞受賞作は、怪奇幻想系の「月光キネマ」でした。この懐の深さ、広さを見てほしいんです。ここまでテイストの異なるものが受賞作として並んでいることは、他の文学賞ではあまりないと思うんです。**夏井** この賞は、ここまで広く受け止めている、ということを知ってほしいですね。

**田丸** さらにショートショートのパラエティの豊かさを知ってほしいんです。下火になってから止まっていたショートショートの時を進めたいんです。ショートショートは続いている、そしてここから広

がっていく、ということを感じてほしいんです。

——夏井さん、坊っちゃん文学賞へのエールを！

**夏井** 実は今日、私が何を言える？ という気持ちで来たんですけど(笑)、田丸さんを目の当たりにし、これは大丈夫だと思いました。中心になつて種をまこうとしている人がどんな人かで、自然にダメになることもあるだろうけど、こんなに熱くて素敵な若者がいる。その存在だけで、

坊っちゃん文学賞、そしてショートショートの未来があると思えました。

**田丸** 何よりのエールです。賞がすべてではありませんが、ひとつわかりやすいものがここにあって、みんな一回、来てみて！ という場所として、坊っちゃん文学賞を盛り上げたいです。応募数も文学賞のなかで突出しているんです。2000〜3000作でもすごい！ と言われるなか、7000〜9000作もの応募

募作が来ている。そういう意味でも、開かれた文学賞に、そしてショートショートのひとつの頂にしていきたい。そして僕は、松山市がこの賞を主催していることに本当に意味を感じているんです。この賞は、税金で運営されている文学賞。「ことばと文学のまち」松山市の本気度、気概に

しびれているんです。坊っちゃん文学賞を高め、周りに波及していくものに、そして賞から輩出された方の活動が気

づいたら、こんなに大きくなっていった、というカルチャーにしたいんです。

**夏井** 松山には正岡子規という宝がいます。俳人として高い子規さんは、俳句のみならず、文章、短歌の改革を、ことば、文字というものを、病床にあつたときですら、楽しんでいました。散文も韻文も、短歌も俳句もひとつの器のなかに入れて。私たちは、彼の生きた松山という器のなかでそれができる。俳句も、ショートショートも、皆、一緒に。ここは、ほんとの意味での「ことばのまち」になっていくかもね。

受賞作を読み、こういう風に進化、分化しているんだ！とびつくりしました(夏井)



なつい・いつき ● 1957年、愛媛県生まれ。俳句集団「いつき組」組長。創作活動 & 指導に加え、俳句の授業〈句会ライブ〉、全国高等学校俳句選手権大会「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。MBS『プレバト!!!』俳句コーナーなどテレビラジオの出演多数。2015年、俳都松山大使に就任。松山市在住。

◎第20回坊っちゃん文学賞 応募要項

募集作品：4000字以内のショートショート  
 応募方法・募集締切：  
 インターネットでの応募：  
 令和5年9月30日(土)  
 23時59分までに応募フォームから応募  
 郵送での応募：9月30日(土) (必着)  
 賞：大賞(1名)：賞金50万円、  
 佳作(5名)：賞金10万円  
 大賞作品は『ダ・ヴィンチ』に掲載  
 詳細は公式HPへ  
<https://bocchan-shortshort-matsuyama.jp/about.html>

『2023年版 夏井いつきの365日季語手帖』

夏井いつき レゾンクリエイト発行  
 日版アイ・ピー・エス発売 1650円(税込)



「毎日一季語」を知り、「毎日一句」を味わい、詠んだ句を「投句」でき、自分の俳句が夏井いつきに届く——。俳句のある毎日をおくりたい人たちのための、人気シリーズ第7弾。

『憂鬱探偵』

田丸雅智  
 ワニブックス 1430円(税込)



月曜日は気分が沈む、足を踏まれる、スマホの充電がなくなる……。誰にもある憂鬱な出来事の裏側にある“秘密”をイヤイヤ暴く、どこか冴えない探偵のショートショート。